

天台教学における仏種子の概念に関する考察 ——「子」の検討を中心に——

田 村 完 爾

はじめに 本誌五十六卷二号では「天台教学における仏種の概念について」と題し、天台智顗閲読の経論中の「種」の語を検討し、その後、智顗の主要著述において「種」の語がどのように咀嚼・展開されたかについて概観した。そして、智顗の仏種論は徹底した開会思想に基づくことを確認した。またその中で、仏性と仏種の二面性を問題とした。智顗は仏性と仏種を基本的に同一と見るが、衆生に具わる仏種の永遠不変の面や仏の種姓（血統）を論ずる場合は「仏性」の語を多く、現実の中で仏道を進むに当たっては、種々の能動的な面において「仏種」の語を多く用いる。智顗において仏性は、正因（法性）、仏種は了因（智慧）の側面が強いと窺われる。また智顗は、仏の衆生教化の始終を種熟脱三益（衆生に仏種を種え、育て、解脱させる三段階の教化）として確立する。これは前時代・同時代の諸師には見えない（ただし智顗閲読の『阿毘曇毘婆沙論』（大正二八・二a、二五b、一〇一b、一一六c、一六三b）等とその淵源を確認できる）。

ところでその際、「種」以外の仏種を示す語として「子」があることを指摘した。種姓論の面から智顗の仏種論を検討すると、仏と衆生の父子関係、必然的な感応・教化の繋がりが見えてくる。ここでキーワードとなるのは「種」の語であるよりも、同じ種を意味する「子」の語であると窺われる。本稿では、同じ種を意味する語「子」について、智顗の著述中の用例を検索し、直接種子を指す場合に限定せず、広くその意味・概念について逐一検討を行い、智顗の仏種論の一面を明示したい。

一 『法華玄義』

I 釈尊と衆生との父子関係 「天性を会して父子を定めらる」等、「天性」の語を頻繁に用いて釈尊と衆生との父子関係を語る（智顗の著述中一八例見える）。『孝経』には「子曰ク。父子之道。天性也」（『新釈漢文大系』35・二四九）という文があり、釈尊と衆生との父子関係を、中国的倫理観に基づき説示しているものと思われる。智顗は「天性」「父子」の語を

用いて、九法界と仏法界が本質的に一如であること（大正三三・六九〇b）、『法華經』において仏と衆生の父子関係を明かし衆生界を仏界に開會すること、一切法を仏法として開會すること（六九五c）を示す。また智顗において「天性」は、衆生所具の三因仏性を意味する（七五七b）。すなわち「天性」を定めることは仏と衆生の父子関係を明かすこと＝仏性を開顯することを意味し、授記作仏につながる。智顗によれば、父母の身体をもらって父母に似た身体を成すこと（遺伝）は「天性」を為すことであり、仏と衆生との戒定慧にわたる親子の信賴關係、さらには父子の感應による教化を示す（七五五b）。そして眞の仏子とは『法華經』において聞思修三慧を成就し法身を生じた菩薩をいい、「天性」を定め眷屬となつた者とする（七五五b）。眷屬妙釈では、理性眷屬を本質的な釈尊と衆生との父子關係から一切衆生に当てはめる。業生眷屬を説明する所では、現実には不失心の子（素直に従う衆生）、失心の子（迷える衆生）があるとして、父子の結縁の遲速を示す（七五五c）。

II 諸經論に基づき、「子」を菩薩、諸仏、大乘の信に比している（七五七c）。

III 子縛・果縛 子と果を一對として考え、子を仏種ではなく惡道に墮す種として用い、子縛（煩惱の種）・果縛（煩惱の結果としての苦果）の語を用いて斷惑論を展開する（七一a）。

天台教學における仏種子の概念に関する考察（田村）

IV 無子仏 『大智度論』冒頭の「稽首智度無子仏」（智顗の引用）の偈文に基づき、仏は完全な仏果を得ているので子（仏の種子）がないと解説する（七四六c）。

V 仏子は法身より生ずると説く（七五五a）。

VI 蓮子の譬喩において、蓮の種子から蓮実が成ずるまで（修行の始めから終わりまで、無明から仏界まで）、妙法を喩えているとし、衆生は本来仏と同質であり（子果一如）、仏種が欠けずに存在していると示す（七七三b）。この種子の譬喩は常住不改を意味し、仏性的である。また、蓮華種子は正因仏性を喩えるとも述べている。

VII 初発の菩提心に一切の功德が収まることを蓮子に喩えている（七七三c）。

VIII 一連の蓮子の譬喩では、能動性（乘種側面）と継続性（性種側面）を具有する仏種の特徴を表し、仏種には、十如是（相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等）が具足されていることを示す（七七三b以下）。ここに、仏種の有する、諸法の集約的側面が看取される。さらに、十二因縁・四諦・本迹十妙等も蓮子に集約されて語られる（七七四a以下）。

IX 蓮子が蓮房より落ちて更に蓮華を生じ、無量の蓮華を生ずる譬喩を用いて、眷屬の増加を示す（七七四c）。仏の修因得果・自行化他が世々に展開することを、蓮子が展転して生長する様に比す（同前）。

二 『法華文句』

I 子縛・果縛 (大正三四・一一a)

II 釈尊と衆生との父子関係 「天性を会して父子を定める」の文を用い、『法華経』を聞いて釈尊と衆生との父子関係を定め、授記作仏が行われるとする(二〇a他)。父子の「天性」を定めれば全ての仏子(仏と結縁した衆生。七方便―三藏教の声聞・縁覚、通教の声聞・縁覚・菩薩、別教の菩薩、円教の菩薩)は菩薩として開会されると説く(四七b、五五a他)。三乗即一乗と開会することも父子の「天性」を定めることに当たる(八六c)。

III 父子の感応による教化 譬喩品三車火宅喩の解説では、

仏(父)は衆生の大善(子の命。善根Ⅱ仏種)に応じて法身より応身を現じ、三界の火宅から命をかけて救い出すと示し、仏と衆生との父子関係・感応教化を述べる(六九a)。衆生(子)が苦しめば仏(父)は憂念し、苦を脱れば泰然となり、歡喜すれば喜ぶとし、父子が交互に一意を現していると説明する(六九c)。すなわち仏と衆生との一体性、感応を示している。

信解品長者窮子喩の解説では、衆生(子)が退転して一旦仏(父)と離別しても、衆生の苦が機根となって仏の大悲をたたき、再び巡り会い教化を受けるとする(八〇b)。また出世の善根(仏種)が大小乗の機根となり、仏の大慈悲をたた

いて感応して再会したと述べられる(八二b)。

寿量品良医治子喩の解説では、三世にわたる父子の感応教化が説かれる(一三四a)。すなわち毒を飲んで本心を失った息子(迷える衆生)が父の計報(釈尊の仮の涅槃)によって目を醒まし、薬を服す(修行して仏道の因縁を作す)ことによって未来の応化を感じると述べる(一三五b)。また、子供達の中毒が皆な癒えたことを父が聞き、元氣になった子供達全員と対面する場面について、仏と衆生との未来の感応道交であると示す(一三五c)。本書は『法華玄義』に比して、父子の感応道交について多くの解説が見える。

IV 衆生に平等に具わる仏性 仏(父)は衆生(子)に等しく仏性があることを見て、平等に利益(大白牛車。『法華経』)を与えるとする(七二a)。

V 西方無量寿仏は縁が異なるので娑婆の衆生と父子の義を成じないとする(八〇b)。

VI 仏種子の相続不断 子(仏弟子)は親(仏)の家業を継ぎ、胤族(仏教教団)を断ぜしめないこと、仏種の相続不断、大乘の家業を相伝すること、等を説き、「仏種」と「子」をつなげて解釈する(八二a)。

VII 大乘の仏種を種える―天性の結縁 父(仏)は昔かつて子(衆生)に大乘の仏種を種えたが、この大乘の仏種を種えたことをもって「子」と名付けるといふ(八五a)。ここでは

明確に「種」と「子」が同一範疇で語られている。また智顗は、この下種を「天性の結縁」と述べている(九〇c)。

VIII 智慧を子に比す 実相を仏とし実智を子とすると解釈する(一一〇b)。

IX 正因・了因・縁因の仏子 ①正因の仏子は一切衆生を指すといい、一切衆生は性徳の三因仏性を有して仏子であるとする。②縁因の仏子は、釈尊と過去世に結縁した者を指すとし、この者達も三因仏性を具える(正因仏性中心)が、この三因仏性は縁因仏性に属するものであり、縁因仏性が今日の法華の会座において理解の助けとなると説く。この仏子は法華会座において十信に位置する者達であるとする。③了因の仏子は、今日法華経を聞いて実智の中に安住した(初住に入った)者を指すとし、この者達も三因仏性を具えるが、今法華の会座において既に顕了に仏性を見たので、三因では了因に属するとする(一二四b)。

X 失心の子と不失心の子 寿量品良医治子喩における不失心の子(毒薬を飲んだが本心を失っていない子)は仏を見て仏道を修し煩惱を断じた弟子、失心の子(毒薬を飲み本心を失った子)は善根が軽く悪業が重いので仏を見て救護を求めても修行しない衆生と規定し、後者の衆生を教化するために仏は仮の涅槃を示すと解説する(一二四c)。

三 『摩訶止観』 本書では種子を意味する「子」を用いる

天台教学における仏種子の概念に関する考察(田村)

場合は少なく、父母の子に対する慈愛・感応・守護を説く場合がほとんどである(大正四六・四一b、四三a、七五c、九四b、九四c、一一一a、一一一b)。種子を意味する「子」の用例としては、子(原因)と果(結果)を一对で考える用例が見受けられる(八五a)。

四 『維摩経玄疏』 本疏における「子」の用例の中心は『維摩経』の「須弥山を芥子に入れる」(大正一四・五四六b)譬喩の活用である(大正三八・五二八c、五三一c、五五〇b)。一念心に一切三世諸法・無情の存在を具えること、智慧が煩惱を断ずることなく涅槃に入ること、等を芥子の譬喩を用いて説明している。

五 『維摩経文疏』

I 釈尊と衆生との父子関係 法華時において釈尊と衆生は「父子の天性を定める」とする(統藏一八・四九五b)。果を仏、因を仏子に配する(四九六b)。因位にあつて菩薩行を修する者を仏子とする(四九六c)。

II 須弥を芥子に入れる 『維摩経』の「須弥を芥子に入れる」という文を不思議(凡夫の思議を超えた悟りの境地)とする(五〇四c)。「須弥を芥子に入れる」文を、煩惱を断ぜず涅槃に入る(煩惱即菩提。生死即涅槃)ことを意味すると説くとする(六三六c)。不思議解脱に住すれば「須弥を芥子に入れ」種々変現するとし、三徳解脱における方便解脱(資成軌)

(六三六c)、または真性解脱(真性軌)に当てはめる(六四二a)。さらに「須弥を芥子に入れる」の文は、『華嚴經』の「一微塵に大千の経卷あり」(大正九・六二四取意)、「衆生の一念心は如来心である」(四三〇a等取意)等の文に共通すると述べる。また、『維摩經』の「諸仏の解脱は衆生の心行中に求むべし」(大正一四・五六八a)の文を重視し、観心によって衆生の一念心に一切法が具わることとを体得することを勧奨する(続藏一八・六四二a)。

III 父母は剛柔を兼ねて子を育てるとする(五〇六b)。

IV 観法を行ずる者を真の仏子とする(五二二c)。

V 仏子を仏種性・仏種とつなげて解釈する 修行者が修行を成就し初住位に登った時、天性と相関わり、真の仏子、法王子となると述べる。すなわち仏家に生在し種性が真正であると説く。そして深く善本(仏種)を植えているとする(五二二c)。すなわち、仏子を仏種性、仏種とつなげて解釈している。

VI 四教の子 智顗によれば仏法は四種の誠の孝の道であるとし、衆生は四教の法王の子であるとされる。そして正しく四教に順じて修行することが孝行であり、不惜身命をもつて四教を弘宣することが忠に当たるとする。四種の誠の孝は不思議解脱に入る方法であり、四土に往生する種となるという(五二七a)。

VII 弟子は父を捨てて師を父の如く敬う 『論語』に示され

る孔子と顔回の師弟関係(顔回は師の孔子を父の如く敬い、孔子は顔回を弟の如く処した。『新釈漢文大系』1・二三九)を示し、釈尊と弟子の父子の如き師弟関係を説明する(五三八b)。また、仏教で説く一切衆生と仏の父子関係には、世間的(儒教的)な倫理的側面と、出世間的(理)な側面とがあり、仏教では、この二者を許容していると説明する(同前)。

VIII 仏弟子は仏を父に、法を母に代えたとする(六〇一c)。

IX 諸仏(父母)の衆生(子)への慈悲 諸仏の慈悲とは、衆生を一子の如く視る(一子地に住する)ことであるとする(六一四c)。また、衆生(子)が苦を離れば仏(父母)も歡樂すると説く(六〇二c)。『維摩經』の文「たとえば長者に唯一子がいたとして、その子が病氣になったならば、父母もまた病み、その子が癒えれば、父母もまた癒える如くである」(大正一四・五六八a取意)の文を用い、菩薩が権実二智(父母)によって大悲を起し、衆生に痴愛の病があれば、二智・大悲を持つ仏は(衆生と感応して)法身より応身を起し教化を行うと説く(続藏一八・六二〇b)。

X 修行者が中道を見れば(初住以上) 仏子となり、妙覺に上ると仏子ではなく仏になるとする(六六九c)。

XI 菩薩の根性を仏子とする 菩薩の根性は仏子であり、菩薩は仏に似ており仏の種類であり、仏心に順ずることができるとする。対し二乗は大乘の根性が無く、仏に似ず仏の種

類ではないとする（六七一c）。

六 『大本四教義』 本書では、『維摩經』の須弥を芥子に入れる譬喩を用いて円教の智断を説明している（大正四六・七六一a）。

小結 以上、智顗の著述における「子」の概念を全て一通り検討してきた。

「子」は「種」と同様、植物的な種と動物的な種の二義を併せ持つが、「種」に比較して後者の側面をより多く有することが確認できる。「子」は、釈尊と衆生との父子関係の中で、そのあり方が論じられている。また、「子」には、種姓的（仏性的）でありながら、躍動的・能動的（仏種性的）側面を有することも確認できる。

父子関係の観点では「天性を会して父子を定める」という、『孝經』等に基づく儒教的父子関係の活用が目立つ。その中で「天性」は仏性として置きかえられる。また、この釈尊と衆生との父子関係は、仏種を介した感応による教化、七方便または一切衆生を仏子とする開会の法門、父子関係と師弟関係の関連、中道を証する初住位を法王子とする説示等、種々に述べられる。智顗の説く父子関係・師弟関係には儒教的側面が垣間見られる。

また、仏子は仏種を断絶してはならないと誠める箇所も見える。さらに、仏種を種えた衆生を仏子するという明確な

結縁関係も示される。仏子を仏種性・仏種とつなげて理解している箇所もある。

智顗は『維摩經』に示される「一子地」（衆生を一人息子のように慈悲をもって視る境地）の心地を重視する。また『法華經』の法華七喩の中では、譬喩品の三車火宅喩、信解品の長者窮子喩、寿量品の良医治子喩が釈尊と衆生との父子関係を示しており、これを重視し種々に解説している。さらに言えば、この問題は、方便品の「一大事因縁」による釈尊の衆生教化に際する必然的な衆生との感応の関係等に繋がってくる（田村完爾稿「天台大師智顗における「一大事因縁」受容の一考察」『大崎学報』一五八号所収）参照）。

「子」は「子と果」すなわち仏種と仏果という一双の関係をもって論じられる場合があり、成仏の因子としての意義付けが看取できる。

また「子」には、「須弥山を芥子に入れる」という集約的な側面もある。一念心に一切三世諸法・無情の存在を具えること、智慧が煩惱を断ずることなく涅槃に入ること（円教の智断）、煩惱即菩提・生死即涅槃、不思議解脱（三徳解脱）等を、芥子の譬喩を用いて説明している。

蓮子の譬喩では、能動性（仏種性的側面）と継続性（仏性的側面）を具有する仏種の特徴を表している。仏種には、十如是・十二因縁・四諦・本迹十妙等の諸法、一切の功德が具足され

天台教学における仏種子の概念に関する考察(田村)

一九六

ていることを示す。ここに、仏種の有する、諸法の集約的側面が看取される。また、仏種が自行化他にわたり世々に展転・生長・展開することも示される。

このように、智顗における「子」の語には、釈尊と衆生との父子関係と、両者をつなぐ仏種、その集約性・継続性・展開性、等の意味・概念が込められていることが判明した。なお今後は、天台智顗における、教主釈尊の有する「父性」について考察を深めていきたい。

〈付記〉今回の検討では、『法華文句』に多く「子」の語を確認することができた。ただし同書は筆記者灌頂が吉蔵の著述を参考にして増広した箇所が少なからずある。しかし、本稿では、吉蔵の著述との詳細な比較検討は、いまだ行っていない。ちなみに『法華玄論』には「會^ニ父子ノ天性^ヲ」(大正三四・三六八^a)の文が一箇所、『法華義疏』には「父子ノ天性感應道交」(同五四六^b)の文が一箇所、『法華遊意』には「會^{シテ}其ノ天性^ヲ以^テ為^スレ付^スレ子^ニ」(同六四六頁^b)の文が一箇所見えるが、それ以外には「天性」をもって父子関係を論じた箇所は見えず、「感應」をもって父子関係を論じた箇所は少ない。『法華統略』『法華論疏』には「天性」をもって父子関係を論じた箇所はなく、「感應」をもって父子関係を論じた箇所も少ない。

ところで光宅寺法雲『法華義記』には、「天性」と「父子」

を併せて解説する箇所が五箇所見える(「天性存父子之義」(大正三三・六三五^b)、「會父子天性」(六四〇^a)、「敘父子天性」(六四〇^a)、「明會父子天性」(六四二^a)、「會父子天性」(六四四^b)。ただし、智顗ほど詳細かつ多岐にわたる解釈は施されていない。「天性」「父子」の説示に関しては、智顗は法雲の説示を継承発展せしめたものと思われる。

〈キーワード〉

中国、陳、隋、天台教学、天台智顗、法華玄義、法華文句、維摩經文疏、仏種、仏子、仏性、天性、父子、感應

(立正大学准教授・文修)